

「知のネットワーク」を活用した 人材育成に向けた取組

- 高校生を対象にした「大学講義」“本物体験”の開催 -



飯田市企画部企画課

背景

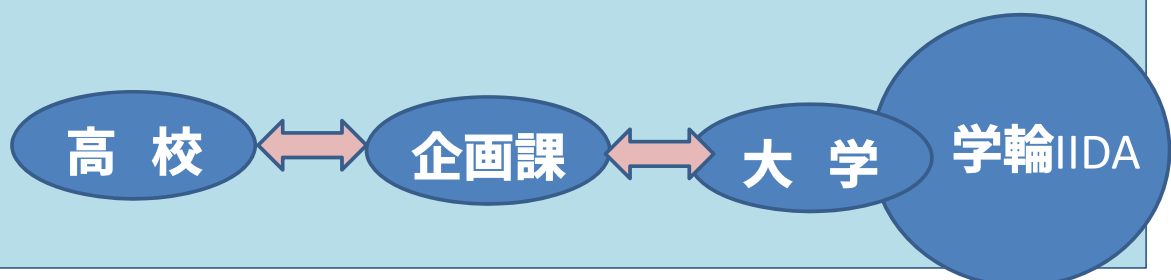
- 当地域には、4年制大学が存在しない
- 大学を有する地域と比べ、地域住民（高校生）が、大学の存在に触れる機会が少ない
- 一方で、多くの大学(研究者・大学)が、この地域を「学びの場」として訪れ、教育・研究活動を行っている
- 大学連携会議「学輪IIIDA」という、飯田に価値を有する大学研究者によるネットワーク組織もある

狙 い

- 学輪IIDAのネットワークを活用し、当地域の中学生や高校生達が「本物の大学講義」を受ける機会がつかれないか（この地にいながら、最高学府の学問に直接触れる機会を提供する）
- 大学講義に触れることで「学ぶことの楽しさを知る」「広い世界、さまざまな世界があることを知る」「一方向からばかりでなく、多面的に物事を見ることを知る」「自分を取り巻く世界、環境を知る」「自分の可能性を知る」など、何かしらのきっかけとなることを期待する
- さらに様々な学問領域を学ぶことは、人の自由な思考を可能にする教養を身につけることにも通じ、大局観、直観力を身に付けたより豊かな人間力育成につながるのではないか

具体的な取組

- 高校生を対象とした大学教授による出張講座を、初めての試みとして実施
- 高校の「課題研究」の取組を通じて南信州・飯田フィールドスタディへの参加など、大学連携の取組でつながりのあった長野県飯田風越高校で実施
- 学輪IIDAのメンバーで、大学の研修等で頻繁にこの地を訪れている法政大学国際文化学部の高柳俊男教授に依頼



具体的な取組

大学出前講座の実施

- 日時：平成25年12月26日（木） 午前10時10分～午後12時30分
- 場所：飯田風越高等学校
- 講師：法政大学国際文化学部学部長 高柳 俊男 教授
- 対象：飯田風越高等学校 国際教養科 2年生
- テーマ
「日本人と韓国語—隣国のことばをどう学んできたか」

日本人が明治時代以来、このことばとどう接してきたかをたどることを通して、隣国との望ましい関係や異文化理解を考える。あわせて、飯田・下伊那地域と朝鮮半島との交流に関しても、当地に残るさまざまな手がかりをもとに考察していく

講義の様子



講義の様子



受講学生の感想 (抜粋)

- 第2外国語で韓国語を学んでいることもあり、とても興味深い講義であった。韓国語だけでなく様々な語学を学ぶことは、自分自身の将来の道を切り開いていくためにも大切なことだと認識した
- 大学教授の講義を初めて受講したが、とても引き付けられる内容だった。もっと多くの話を聞いてみたい、探究してみたいと思った。
- 大学に進学したら、韓国語を履修してみたいと思う
- 日本と韓国との関係を、改めて認識する機会になった
- 今回の講義を通じて、歴史のあることがら、ある人物についてただ暗記するのではなく、それらの背景を理解していくことの大切さを知った
- 現在は韓国語を学ぶ環境があるが、つい最近までは学ぶことが困難な時代があったことを知り、韓国語や日本と韓国との関係をもっと深く学んでみたいと思った
- 韓国はドラマやK-popなどのイメージしかなかったが、今回の講義を通じて関係構築に尽力した人達の努力などを知るなかで、韓国のことをもっと深く学んでみたいと思った

受講学生の感想 (抜粋)

- 歴史の大切さと歴史を学ぶ楽しさを知る機会となった
- 大学での研究や勉強のために、高校での学習で基礎力をつける必要があることを認識した
- 韓国だけでなく、他国との友好関係を構築していくためには、ある側面だけを見るのではなく、他面から国を見て学んでいくことの重要性を知った
- 今は当たり前のように韓国語を勉強しているが、ここに至るまでの歴史や障害を知り、勉強できることは幸せな事だと思った
- この地域が、韓国とつながる歴史や事柄があることを知りびっくりした
- 戦時中の日本人向け韓国語会話集の内容を知り、衝撃を受けた
- 戦時中は朝鮮を植民地支配するために手段としての語学学習であったが、そのような目的で語学が学ばれる時代が二度と来ないでほしいと思う。語学はお互いの文化や習慣を学ぶための架け橋にしていかなければいけないと思った

今後の展開

- 今回の試みを通じて、高校生に新たな気付きや学びへの意欲など、一定の効果があることが確認できた
- 飯田市としては、このような取組を今後更に展開していきたいと考える。(様々な高校での実施や中学校での実施など)
- 飯田が縁でつながった「知のネットワーク」を、今後も地域の将来を担う人材育成につなげていければと考える
- 学輪IIDAの先生方にも、是非ご協力いただきたい

これから中学生高校生が進む先に待っている実社会では、正解が一つだけということはありませんし、むしろ正解がない場合の方が多かったです。そのような中でも自分なりの判断、決断が要求されてきます。自分の将来を考えた時、地域の将来を考えた時、多くの選択肢の中から自らの考えで答えを導き出していけるような能力を備えた「人」づくりに多くの力をお借りしたいと考えます。